

伊賀市石山古墳出土の三角縁神獸鏡について

吉水康夫・穂積裕昌

はじめに

石山古墳は、三重県伊賀市才良に所在する全長120mの前方後円墳である。

昭和23~26年に京都大学考古学教室によって発掘調査が行われ、墳丘を取り巻く円筒埴輪列、後円部頂に設けられた三棺合葬の埋葬施設とそこから出土した豊富な副葬品、埋葬施設上に樹立された家形埴輪群とそれを囲繞する二重の器財埴輪列、それに後円部寄りのくびれ部に付設された「東方外区」とそこに樹立された家形埴輪と圓形埴輪など多大の調査成果が得られた（小林1951~1955）。このうち、後円部上の埋葬施設は、西櫛が箱式木棺、中央櫛と東櫛が粘土櫛で、西櫛からは腕輪形石製品・石製模造品・素環頭大刀・剣・玉類・鉄製農工具・仿製神獸鏡、小形鏡が、中央櫛からは小札革綴冑・鉄製農工具・鉄鎌・盾・石製模造品が、東櫛からは盾・銅鎌・鉄鎌・刀・剣・長方板革綴短甲・鉄製漁具・鉄製農工具・玉類・石製模造品・内行花文鏡などが出土した他、中央櫛と東櫛の両脇からは盾や刀剣をはじめとした大量の武器・武具、農工具類が櫛外遺物として配されていた。これら石山古墳の出土品は、1993年に京都大学で開催された「紫金山古墳と石山古墳」展でその概要がかなり細かく紹介された（京都大学考古学研究室1993）。さらに2005年には、三重県埋蔵文化財センターの第24回埋蔵文化財展として「石山古墳」展が開催され、石山古墳の豊富な出土品が地元三重でも公開された。この展示会では、東方外区出土埴輪資料のうち、1993年の京大展示で紹介し切れなかった分もその出土状態とともに初公表されている（三重県埋蔵文化財センター2005）。

ところで、石山古墳の資料は、京都大学が所蔵しているもの以外に、地元丸山中学校が所蔵している円筒埴輪や、宮内庁書陵部が所蔵している剣形模造品など若干が知られている。こうした京都大学所蔵資料以外の石山古墳資料に、今回報告する三重県埋蔵文化財センター所蔵の「三角縁神獸鏡」片がある。

本資料は、すでに『三重県埋文センター通信 みえ』No.3で資料紹介がなされたほか（吉水1991）、1991年開催の第10回三重県埋蔵文化財展「三重の古鏡」展（三重県埋蔵文化財センター1991）や前述の「石山古墳」展でも展示、図録掲載され、研究者間では一定程度の周知がなされているものと考える。しかし、これまでの紹介が写真紹介であったため、今回、実測図と新たに撮影した写真を改めて提示するとともに、若干の検討を行っておきたい。

1 発見の経緯・出土地点と埋納櫛の推定

本資料は、本稿の執筆者のひとりである吉水が、1983年11月頃、埴輪を研究テーマとしている先輩を現地に案内した際、後円部頂の主体部調査痕かと思われる縫み付近で偶然採集したものである。図1は、三重県史編纂室による石山古墳詳細測量図（三重県埋蔵文化財センター2005に転載）で、後円部頂の調査痕の縫みも明瞭に確認できる。

石山古墳では、西櫛と東櫛は未盗掘の状態であった一方、中央櫛の中央部から西櫛一中央櫛間の櫛外にかけては盗掘が及んでいた。西櫛・東櫛における銅鏡の出土場所は、いずれも櫛中央から北側にかけてであるが、中央櫛ではちょうどこの部分も盗掘が及んでいる。このことと、わずか3面とはいえ石山古墳で確認できる鏡がいずれも櫛内（棺内）副葬であることから、本三角縁神獸鏡も中央櫛に伴っていた鏡である可能性が指摘されている（竹内・角正2005）。ただし、三角縁神獸鏡は、棺外・櫛外に置かれる例がしばしばみられるほか、大阪府駒ヶ谷宮山古墳などのように粘土櫛の被覆粘土内に埋め込まれた例も知られており（大阪大学1964）、必ずしも棺内遺物とばかりは言い切れない側面もある。しかし、その場合においても、三角縁神獸鏡が本来存在した主体部としては、櫛（棺）の内外かまでは特定できないものの、盗掘の害にあった中央櫛の副葬品であった可能性を改めて提起しておきたい。

2 資料の概要

すでに資料の簡単な概要は紹介しているが（吉水1991）、改めて本資料の詳細を確認しておきたい。

鏡片は、三角形状をなす縁部を含む2.8cm×2.7cmの小片である（図2）。縁部の高さは最大7mm、これに続く外区断面の厚みは2mmである。縁の内側には、鋸歯文帯→複線波文帯→鋸歯文帯と続く文様が鋳出されている。外側鋸歯文帯→複線波文帯間、複線波文帯→内側鋸歯文帯間には、それぞれ極めて低いながらも明瞭な突出稜線が鋳出され、文様間を区画している。全体に鋳上がりは悪く、外周部の残存も少ないため直径の復元も困難である。

外区外側の鋸歯文帯は、縁部と外区の境界部が本資料で最も薄い1.5mmとなっており、縁部から複線波紋帯外縁の突出稜線に向かって続く緩やかな凹みを形成し、結果として外周の三角縁をより際立たせている。外側鋸歯文帯は、この凹部に鋳出しされているため鋳上がりは極めて悪い。

複線波文帯の鋳上がりも極めて悪い。元範の痛みか范ズレによるものかなどは明らかでないが、波文が途切れたり、内側鋸歯文帯外周の突出稜線部に重なった部分もみられる。

一方、内側鋸歯文帯は比較的明瞭で、頂点が外向きとなるポジ部の鋸歯も明瞭である。鋸歯文様は、ネガ部が平坦面を形成するのに対して、ポジ部は鋳出した際の影響か、後の研磨によるものかなどは明らかでないが、鋸歯個々の横断面はカマボコ状の立体的な丸みをもっており、頂部が明瞭な平坦面を形成していないことが観察される。

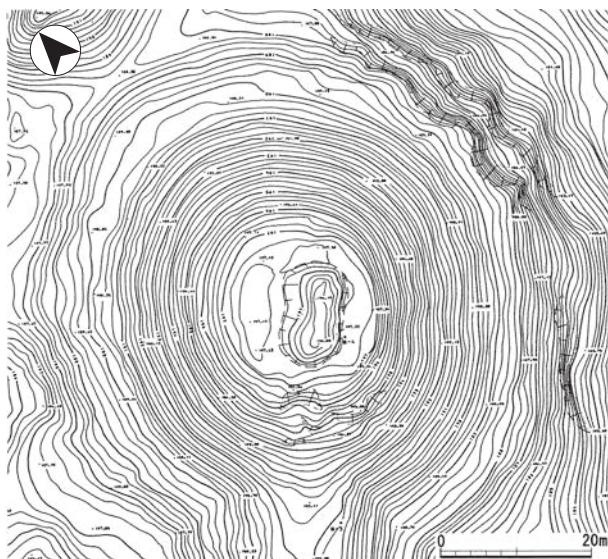
以上のことから、本資料については、外周部が三角縁であることや外区文様の特徴から、基本的に「三角縁神獸鏡」として理解してよいものと判断される。そのうえで、外区の厚みが極めて薄いことは内区と外区とがさほど立体的に区画されていないことを窺わせ、鏡背面がかなり平坦であることを予想させる。ただし、鋳上がりや残存状態の悪い小片であるため、いわゆる「舶載」か「仿製」かの区別はここでは留保しておきたい。

3 石山古墳における三角縁神獸鏡の意味

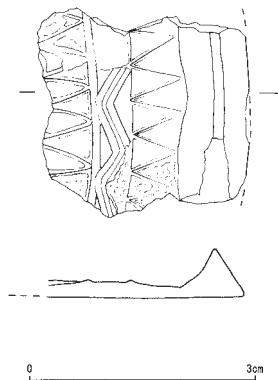
以下、本資料が三角縁神獸鏡であることと、本資料が本来中央槻に配されていた副葬品が盜掘時に周辺散在したものの中の一部である蓋然性が高いということを念頭に、石山古墳の三角縁神獸鏡の意味を若干考えておきたい。

石山古墳における銅鏡の出土は、本資料以外では西槻棺内の仿製三神三獸鏡と小形鏡、東槻棺内の内行花文鏡があるに過ぎず、豊富な副葬品が出土したわりには出土品全体に占める銅鏡の扱いは低い。しかし、西槻と東槻には鏡種は異なるとはいえ1枚ないし2枚の銅鏡が被葬者近くに副葬されており、三角縁神獸鏡も中心主体である中央槻被葬者に伴った可能性のある副葬品として重要である。

さて、石山古墳における三角縁神獸鏡の意味を考えるために、まず中央槻と東槻の副葬品群を比べてみよう。橋本達也氏は、古墳時代前期に特徴的な甲冑形式の総括名称として「前期甲冑」、同様に中期に特徴的な甲冑形式を「中期甲冑」と呼ぶが（橋本2002）、これを石山古墳の出土品に当てはめた場合、中央槻出土の小札革綴冑は前期甲冑に、東槻出土の長方板革綴短甲は中期甲冑に含まれる。これまで、石山古墳以外で同一の古墳から前期甲冑と中期甲冑が共伴した例は知られておらず、石山古墳の同一古墳からの共伴は極めて特異な事例とされる。このことに関して阪口英毅氏は、石山古墳の3槻が同一墓壙に設置されたことから、基本的に小札革綴冑と長方板革綴短甲がほぼ同時に副葬された共伴事例と判断された。そのうえで、三角縁神獸鏡と定型化した甲冑の共伴に着目した田中晋作氏の研究（田中1992）を援用し、「石山古墳を築造した勢力が小札革綴冑を入手したほかの古墳被葬者たちと同様の関係を古墳時代前期の主導勢力と取り結び、なおかつ百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団で構成される新興勢力からの長方板革綴短甲の供給を受ける立場にあった」ことを指摘されている（阪口2005）。田中氏の研究は、三角縁神獸鏡の配布主体と、長方板革綴短甲に始まる「中期甲冑」の配布主体が異なり、前者が旧勢力、後者が百舌鳥・古



第1図 鏡片が出土した石山古墳後円部 (1 : 1,000)



第2図 三角縁神獣鏡片実測図 (1 : 1)



写真1 (2 : 1)



写真3



写真2



写真4

※ 写真2～4は縮尺不同

市古墳群被葬者に主導された新勢力であったことを想定されたものであるが、小札革綴冑と三角縁神獸鏡はともに「旧勢力」と関係が深い品物というてんで共通する。三角縁神獸鏡が石山古墳中央櫛に副葬されていたとする想定が正しいとすると、中央櫛被葬者の性格がこれまで以上に明瞭になる。

同様の関係は、中央櫛と西櫛についてもあてはまる。西櫛は、大量の腕輪型石製品が出土したことで著名であるが、西櫛被葬者に伴う銅鏡のひとつが仿製三神三獸鏡である。この鏡は、福永信哉氏の研究によると、三角縁神獸鏡に後続する新式の神獸鏡とされ、福永氏はこの種の神獸鏡を副葬する古墳の先進的性格について指摘されている（福永 1999）。そのうえで福永氏は、新式神獸鏡を大和盆地東南部勢力から替わって政治的主導権を握った盆地北部及び河内の新興勢力によって製作・配布された器物として捉えられている。

このように、三角縁神獸鏡を中央櫛出土と考えた場合、中心主体たる「格上」の中央櫛被葬者においては、小札革綴冑と三角縁神獸鏡という古墳時代前期に一世を風靡した伝統的な器物が選択されることになり、東西櫛被葬者に比べて中央櫛被葬者がより伝統的な権威に立脚していたことを示唆する。このことに関して阪口氏は、鈴木一有氏による長方板革綴短甲出土の埋葬施設が当該古墳の中心主体ではないという指摘（鈴木2002）を受けて、石山古墳でも長方板革綴短甲が東櫛、小札革綴冑が中心主体である中央櫛からの出土品であることから、小札革綴冑のほうが高い階層の器物として扱われたことを指摘し、橋本達也氏の小札革綴冑に「冠」としての機能を想定する見解（橋本1996）に注目される（阪口 2005）。石山古墳からの三角縁神獸鏡の出土は、以上のように石山古墳に葬られた被葬者間の性格や特質を考察していくうえでも重要な位置を占める資料のひとつになりえるものといえよう。

本稿を記すにあたっては、八賀晋・森下章司の両氏から懇切なご教示を頂きました。また、図面の清浄は楠純子さん、三角縁神獸鏡の写真撮影は酒井巳紀子さんの援助を受けました。記して感謝の意を表します。

【参考文献】

- 大阪大学 1964 『河内における古墳の調査』 大阪大学文学部国史研究室研究報告第 1 冊
京都大学文学部考古学研究室 1993 『紫金山古墳と石山古墳』 京都大学文学部博物館図録第 6 冊 京都大学文学部博物館
小林行雄 1951 「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報』 1 (昭和 23 年度) 日本考古学協会 p.104
小林行雄 1954 「三重県名賀郡石山古墳 (第 2 年度調査)」『日本考古学年報』 2 (昭和 24 年度) 日本考古学協会 p.102
小林行雄 1955 「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報』 3 (昭和 25 年度) 日本考古学協会 p.95
阪口英毅 2005 「石山古墳甲冑の概要と意義」『石山古墳』三重県埋蔵文化財センター pp.79-84
鈴木一有 2002 「土器塚出土短甲をめぐる問題」『土器塚古墳確認調査報告書』磐田市教育委員会 pp.16-19
竹内英昭・角正芳浩 2005 「石山古墳の副葬品」『石山古墳』三重県埋蔵文化財センター pp.85-88
田中晋作 1993 「百舌鳥・古市古墳群成立の要件—キャスティングポートを握った古墳被葬者たち—」
『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』関西大学 pp.187-213
橋本達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会 pp.255-292
橋本達也 2002 「鋤崎古墳出土短甲の意義」『鋤先古墳-1981 ~ 1983 年調査報告-』福岡市教育委員会 pp.127-129
福永信哉 1999 「古墳時代前期における神獸鏡製作の管理」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集—』
大阪大学考古学研究室 pp.263-280
三重県埋蔵文化財センター 1991 『三重の古鏡』展示図録
三重県埋蔵文化財センター 2005 『石山古墳』展示図録
吉水康夫 1991 「資料紹介 上野市石山古墳採集の三角縁鏡片」『三重県埋文センター通信 みえ』三重県埋蔵文化財センター p.8